『花見の記』(大阪樟蔭女子大学図書館蔵)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸谷, 初江 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4663

『花見の記』

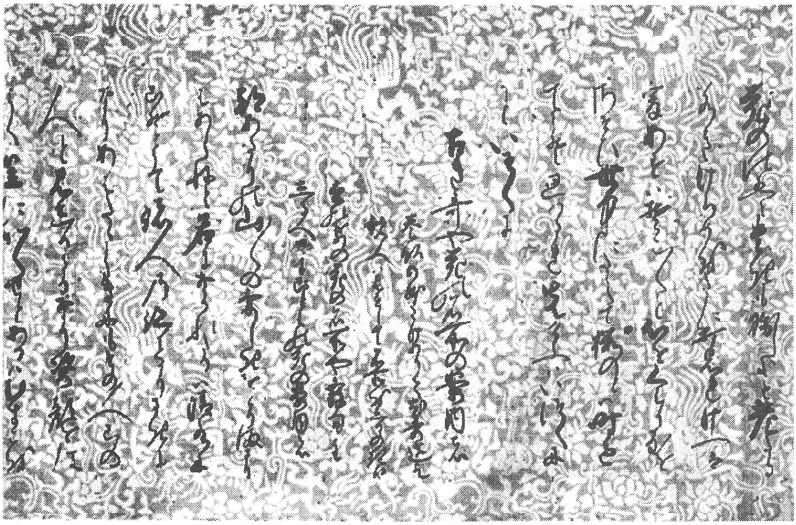
（大阪樟蔭女子大学図書館蔵）

丸谷初江

立圃著『花見の記』は、自筆・写本をあわせて多くの伝本が知られているが、本学図書館蔵の『花見の記』は、全文紹介されたことがなく、しかも本書は既知の伝本のなかでも極めて重要な位置を占める資料と思われるので全文を翻字紹介することにする。

著者立圃は、文禄四年（一五九五）京都一条の雛人形屋に生まれ、寛文九年（一六七〇）七五歳で世を去っている。彼が松永貞徳の門に入り俳諧に手を染めたのは、三十歳以前のことであろうか。まず、貞徳の下で俳諧を学び、寛永八年（一六三一）三七歳の折り同門の松江重頼と図って俳諧撰集『犬子集』の編集を企て、二年後刊行の運びとなったが、その刊行をめぐって重頼と不和となり、その後師貞徳とも疎遠に成り、俳人として独自の活動を始めた。一時は備後国福山藩主水野家に仕えて福山に赴き、藩主に随伴して江戸にも下ってもいる。彼は『三十六歌仙絵』を基にして諧謔味を趣向した『休息歌仙』の画巻や七福神の俳諧自画賛の軸物を多く残し、それらの資料に見られる俳諧性によって俳画の祖と評されている。彼の俳諧活動の中で殊に注目すべきは、堂上の人々との俳諧交流である。立圃は、金閣寺の住職鳳林承章の文化サロンに参加して文芸活動を行い（『隔冥記』第三）、また自らの俳諧作品に後水尾院の評点を賜り法皇の作品に立圃が評点を試みてもいる（俳文学会第五十七回全国大会発表（『法王（後水尾院）御前句付批判』立圃」島本昌一氏）。公家階級と無縁と思われる町中の一俳諧師立圃が、このように堂上の人たちと俳諧の交流を行っていた事は、立圃の文芸活動のみならず江戸初期の俳諧史を理解する上に重要なことであり、見過ごしてはならないであろう。立圃の画賛類の絵や書風には、桃山文化の末流に生きた松花堂昭乗の影響が認められると言われている。昭乗は、承章文化サロンの先輩である。当館所蔵の『花見の記』は、そうした桃山文化の流れを汲み、立圃の書体と料紙の下絵模様が調和して華麗であり、立圃自筆本中の逸品と言えよう。

なお館蔵の『花見の記』には、文中及び巻末に岩倉具起の評語・奥書が見られるが、それらはすべて立圃の筆に成る。具起は、承章



巻頭部分

の文化サロンの一人であり、公家と思われるが、詳細な伝記は明らかでない。

書誌を記す。

野々口立圃著　自筆　一軸

題箋・内題・尾題なし。ただし本書は、一般的に『東山花見之記』『花見の記』の通称で扱われており、後者の呼び名に従うことにした。

装訂　巻子本。天地二五・四糎、全長五一・五糎。見返し一七・二糎。本文は十紙を継ぐ。第一紙四七・七糎。第二紙四九・七糎。第三紙五〇・四糎。第四紙五〇・五糎。第五紙四九・五糎。第六紙五〇・〇糎。第七紙五〇・〇糎。第八紙五〇・四糎。第九紙四九・五糎。第十紙三七・八糎。尾紙八・七糎。

表紙　原装。絹。青朽葉色地縁取り割小菱と小花模様。

料紙　鳥の子布目地。見返し桑色白茶金箔散らし。第一紙白茶地鳳凰唐草草花雲母刷模様。第二紙薄灰汁色亀甲繋雲母刷模様。第三紙白茶地向鳳凰丸唐草繋雲母刷模様。第四紙白茶地小菊亀甲紋雲母刷模様。第五紙淡黄檗地紫陽花紋雲母刷模様。第六紙青朽葉地網目雲母刷模様。第七紙白茶地如意宝珠・草花唐草雲母刷模様。第八紙白茶地小菊唐草繋雲母刷模様。第九紙山吹茶地花菱繋雲母刷模様。第十紙白茶地

蓮の実・芥子の実・松毬・柘榴唐草紋雲母刷模様。尾紙に第十紙に同装飾紙。

評奥書　執々の金玉に今始ずながら、驚愚耳候。以下略。具起。立圃筆。

奥書　依御所望　岩倉校門御詞書迄無残書写　令進覧畢。
　萬治二仲春吉辰　立圃「松翁」（朱印）。

箱書　桐古箱蓋表「ひなや立圃自作自筆花見記」（後人筆）

なお、翻字に当たり、次のような配慮をした。

一、漢字は原則として当用漢字に改めた。ただし特殊な文字及び異体字は原文に従った。

一、カタカナは原則として平仮名に統一したが、必要と思われた場合は原文に従った。

一、読解上の便を考え、私意を以って濁点及び句読点を付した。

一、行移りについては原文に従っていない。ただし、具起の評語については四字下げとし、立圃の本文と区別した。

翻字

花の比は、貴きも賤しきも老たる若きけぢめをだに打忘れ、けふは爰あすはそこ〳〵と心をくばり友をさそひ、世中にたえて桜のとは、時過てこそ思はるれ。先けふはいづくにかといそぐに

古き哥や花の名所の案内者

巻頭の躰たけありて、尤秀逸歟。歌人は見ずして、名所をしるの理候。

言の葉の花の名所や発句主

しるべせよことばの花の案内者

都あたりの山〳〵のけしき、をとりまさりはあらねど、名にながれたるは清水にこそとて、諸人の跡になりさきになり、あはたゞしきにも、その人この人と見しりたるなり。姿顔をばよく笠にかくせと、あるはむすこをさきにたて、あるは供なるわらはにあらはれ、ひとりとしてしのびすましたるはなし。さこそ我をも思ふらめと、時にあたりてはわきまへもなかりしが、先四條河原に出れば、貴賤男女ゆくも帰るもをし分がたく、橋の上に行かゝりたるは、友をまどはし、笠をとられ、髪を引みだれ、顔打あかめて、時をうつせば、いさや浅瀬をわたらんとて、はぎの白きを見するもあり。はる〴〵と五条の橋へまはる人もありけり。（あるべしとはいかゞ。）からうじて祇園林に入てみれば、花は今をさかりにて、打ながめんとすれば、うしろよりをしたをし、前より行あたるに、花見ん事は打わすられ、いとくるしくてかたはらに立のき、あしを休めけるに、鳥居のもとに高札あり。よりてみれば、林の花おる事堅禁制と書り。落花狼藉はくるしからずといへど、かゝる群集のやつばらが手毎に折とらば、花の種も尽ぬべし。

おらせじと花やぎをんの守り札

此句に納受あらば、折ともたゝりあるまじきにや。

色も香もこまやかなるを児桜

といふを聞て

これや此神の氏子のちござくら

此氏子達こそ、花をかざりたる出立ならめ。

花ひとつなく子にとらせうばざくら

あそこの花こゝの松陰に幕打まはし、声をばかりにうたひまへば、心そゞろにうつりて、いざ我〳〵もかた陰によりて、先ひとつたべなんと、丸山の木かげにゐて、さゝえを取まかなへば、此所の名物也とてひしほを出せり。桜の名に思ひあはされて

塩竈の花も時あるひしほ哉

此しほがまのひがたの景こそおもしろけれ。

霊山の木ずゑより、都の上下見わたされたるは、天眼通をえたる心ちして、

あれ見さいこれを都の花盛

これぞ誹発句の本躰ともいふべきにや。

灵山に今もさくらや四種の華

佛在世まで、東山の花におもひよられたる作意、たくみなる歟。ほゐの所にいたりても、佛のかたにはいさゝか心もゆかで、あの花この花、人よりさきによき見所を定んとのみをしあへり。

清水の舞台を花に桟敷哉

見おろせば心や花の上はしり

両句いづれも〳〵

瀧のみやいそぐ花見の下戸上戸

下戸は何とて人数哉らん

観音の誓ひは、枯たる木にもはなさくと也。ましてみどりのこずゑなれば、幾重となく咲みだれて、雲のたなびくがごとし。

菩薩こそ乗うつります花の雲

日も永くまもれやはるの普賢象

かく人ごみなる中に、何たる願をかけつらん、瀧にうたるゝ人もおほかり。さならぬとても、山は花の瀧波をおとせば、おぼえずねがひもかなひつべし。

清水にぬれぬや花の瀧まうで

殊に染愚意候。清水にぬれぬのつゞき、花の瀧詣、奇妙に候。爰は所せし、いざやむかひの山陰のしづかなる所になどいひて、又たちさはぐもあり。其跡をあらそひて、いさかふ人もあり。花あまたある中に、是こそ散もせず咲も残らず、と皆人の目にかゝるあり。その木陰に幕打まはし、しめやかにゐける人五六人と見えしが、茶の湯などたぎらせ、玉のさかづきそこらとりちらし、象戯に心を入てかはる〴〵勝負をあらそへり。これに恥らひて、花見に近よる人あらざりけり。

山に来て心やをのが庭桜

誠に家路もわすれてさる事に候。

殊勝々々

谷〳〵峯々に思ふどち引つれ〳〵、もしはひとり〳〵宿を出たるも、知人に見付られ、袖をひき声をあげ、扇をあげてまねきよせ、又はしらぬ人〳〵とても、木のもとにかたらひよりて、是こそ佛の御引あはせなれ、まことの花のえんなりとて、酔をすゝめて、後にはたがひに手あしをみだれあひ、帰るさ打忘るゝもおほかり。かゝる所

に何の心あてもなく、人にもかゝはらず行めぐるは、よその見る目もくるしかるべし。我ながらも用なき所にさし出たりと、悔しくはづかしきに、花の色も見えわかず。右左のよしある所〳〵も笠をかたぶけ、人に誰ともしられじと気づかひのみして、あしばやに行過るなるべし。ある幕の内に、見めかたち、これこそと目とゞまる程の少人、だゞ今扇をつとりたちけるを見捨がたくて、木陰よりのぞきたれば、今やう一ふしまひたり。お名をばえ申まひと、皆手鼓を打ならしをめきあへり。物ごしのよそ目さへうれしきに、ましてまほにむかひ見ける人、さぞおもしろかるべき。其時盃もちあひたる人、心ちよげに打わらひ、場中に出て、今ひとつたべてとて、こぼるゝばかりくみくはへて、彼少人に慮外申たり。いかにとうけかねたるに、手をとらへてたふ〳〵とくめば、顔打あかめて、けしきばかりもたげたるに又さしより、少人の袖を引たてゝ、これこそ御身のたづぬる子よ、よく〳〵よりてとて、老人の前につれゆけば、よねんなく打ゑみて、目をしのごひ居なをりたまへり。すなはち少人銚子とりてくめり。そこに又、此人よりも年はふたつばかりたけたれど、せいはすこしちいさくかしこげにこひ過て、片膝をしたて扇を車にまはしゐけり。御身も一さしと所望すれば、をめずはゞからずすみかけてゐなをる時、同音に

立出てみねの雲花やあらぬ
はつざくらの祇園林下河原

南をと、うたひあげんとすれど、声かれてさらに出やらず。一度にどつと打笑ひ、三国一でやと興じあへり、物毎に善悪はありけり。我身の程をしらざるゆへに、かゝる目にあひて当座の恥辱のみならず、後までのわらひ草の種ともなる也。

心とき小児やなれて初ざくら
大児のゆだんは、だんごに心を入られつるや。

吉野の山は、もろこしまでもかくれなき花の名どころなれど、見にゆく人まれなるべし。この世をうしと思ひはなれたる法師などこそ、ひとりすご〳〵と見をりて、無常を観じ、おもしろしなども思はれけめ、

人しらぬ太山の花や道心者
此道心者の在所こそ、たづねまほしけれ。

迚長からぬ一期の間は、いかで世のにごりにしまさるべき。しかもかゝる清水の花にたはぶれ、月にうそぶく程はよろづの悪心きえうせて、をしへの道にもかなふべし。けふ此清水寺に詣て、あすのうき世を思はぬは、薩埵の大慈悲と思はるゝぞかし。

花にゐひてしどろもどりの山路かな
彼小哥のおもかげ上手の音曲候。

立圃

執々の金玉に今始ずながら、驚愚耳候。雖為狂詞、不背本歌之風、其躰艶美にして、しかも誹興抜群之作意、無比類候歟。詞書是又感味あさからず、吟賞にたへず、加愚筆者也。

具起

依御所望　岩倉黄門御詞書迄、無殘書写、令進覧畢。

萬治二仲春吉辰　　立圃「松翁」（朱印）